卒業の日に 贈る言葉

「中央大学を卒業したことの自信と誇りを大切に」

学長
福原 紀彦
FUKUHARA Tadahiko

中央大学では、創立から135年に及ぶ伝統と実績を踏まえて、現在、学士課程の学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を、次のように定めています。すなわち、「本学は、「實地應用ノ素ヲ養フ」の建学の精神のもと、本学が設置する教育課程において必要な学修を修了し、「実学」の実践と「実学」教育を通じて涵養された知性をもとに、持続可能な社会を切り拓き、国際社会に貢献できる人材としてふさわしい知識・能力・素養を身に付けた者に対して学位を授与します。」「以下のような能力・素養を身に付けた者に対して学位を授与します。①幅広い教養と学科・専攻に係る専門知識を獲得し、「實地應用ノ素」を身に付けている、②社会の課題を自らの課題として捉え、解決のために幅広い教養や専門知識を用いることができる、③他者や異文化に対する理解力を備え、他者と円滑にコミュニケーションを図ることができる、④生涯にわたり主体性をもって学びを継続できる。」と定めています。これに照らして、中央大学は、卒業生の皆さんに、卒業証書・学位記を授与致しました。

中央大学の学位記を取得された皆さんに対して、在学中の研鑽と健闘を称え、心からお祝い申し上げます。本学卒業生の学修や活動に際して、惜しみない支援や協力を寄せられたご父母とご家族、温かく力強い指導を戴いた教職員、連携先の地域・組織のご関係者、本学出身者の皆さんのご厚情や友情に、感謝と敬意を表したいと思います。

そして、中央大学には、さらに、個々の卒業証書や成績証明書に表現しきれない学生中心の素晴らしい活動があり、それに支えられた誇るべき大学力があります。それは、キャンパスという空間を活用して、また、教職員、御父母、ＯＢＯＧ、社会・地域等との連携によって、実り豊かに形成されており、それらの機会こそ、本学の歴史と伝統を築き、未来を拓く貴重な礎であるということができます。本学の卒業生は、そうした学修と活動経験を通じて、多くの人達に巡り会い、支えられ、今、未来に羽ばたく時期を迎えています。卒業生が向かう Society5.0 とも称される今後の人類社会は、グローバル化の進展とともに情報化社会がいっそう高度化した知識基盤社会であり、人類社会の持続可能な発展のために、自然と共生しつつも、さまざまなリスクとも向き合わなければなりません。だからこそ、中央大学の卒業生の皆さんには、本学で育まれた「行動する知性」のもとに、自分ではまだ気づかない多様な潜在力と可能性があることを信じて戴きたいと思います。

中央大学は、いつでも、いつまでも、どこでも、どこまでも、皆さんの母校です。生涯学び続けて、未来社会を拓き築き支えながら、人生を輝かせるために、今後もいろいろな機会に、本学との絆を大切にして戴ければ幸いです。そして、卒業生の皆さんが、中央大学の卒業生であるという自信と誇りをもって、これからの人生を堂々と歩まれることを祈っています。この時期に巡り会った人間関係、これから巡り会う人間関係を大切にして、元気にご活躍ください。中央大学教職員一同より、心を込めて、「卒業おめでとう！　また会いましょう！」

法学部長
猪股 孝史
INOMATA Takashi

「学士（法学）」の重みとその価値

卒業生の皆さん、ご卒業、まことにおめでとうございます。皆さんに心よりお祝いを申しあげます。そして、この晴れの日を迎えるまで、卒業生の皆さんをよく理解し、寄り添ってこられた、ご家族の皆さん、ご関係の皆さんにも、祝意と敬意を表したく存じます。

中央大学は、1885（明治18）年、「英吉利法律学校」として創立されました。同年９月19日、江東中村楼で行われた開校式において、福澤諭吉は、以下のような祝辞を述べたと伝えられます（本学名誉教授・金原左門「『法の実地応用』をふりかえって」中央評論296号〔2016年〕17頁）。

「法律は社会のあらゆる領域に及ぶものであり、法律は人間生々の学であり、多くの法律家が養成されることが期待される。成業の上、官吏・代言人になることだけが重要なことではない。そんなに沢山の官吏・代言人を社会が必要にしているわけでもないからである。諸君には官吏・代言人にならなくとも、その知識を様々な事業に適用して、一身を護り、一家を護り、屹然たる独立の男子となることを希望する。注意すべきことは、法律を学んで容易にこれを用いないことである。昔封建時代には、刀を抜いて犬を切る者は未熟な若武者に限る、真成の武士は終身刀を抜かず、抜けば必ず敵を切りて誤らずと言ったものである。諸君もこれに学び、（妄りに法知識を振り回すことなく、）法律を以て犬を切ることなく、常日頃は黙して法理を言わず、法知識を使うときは法の敵を斃し、自分の権利栄誉を護るべきである。法律学徒がどちらの途を歩むかは、学識が深いか浅いかによる。学生の皆さんの学問が深くなることを期待する。」

この趣意は、卒業生の皆さんにも献じられてしかるべきものを含みます。語られる言葉は、その当時の事情を考慮しても、いささか穏当さに欠ける憾みがないではありません。けれども、その真意をしかと酌むならば、法を学び、法を学んだ者の心映えを見事に看破しているように思えます。

卒業生の皆さんは、中央大学法学部所定の課程を修めたことの証として、「学士（法学）」の学位を授与されました。皆さんの学問は深くなったものと拝察します。福澤諭吉がその祝辞に込めた趣意、「学士（法学）」の重みとその価値を心に深く刻みつつ、卒業生の皆さんが、それぞれの進路や環境においてご発展、ご活躍されることを心から願って、はなむけの言葉とします。

経済学部長
山﨑 朗
YAMASAKI Akira

変化のキャッチと新しい学びに向けて

皆さんが経済学部の４年間で学んだ知識は、時とともに古くなっていくでしょう。AI、VR（仮想現実）、ドローン、ゲノム編集、デジタル化、量子コンピューター、クラウド、5G、MaaS、プラットフォーマー、SDGs、ダイバーシティといった新しいテクノロジー・企業・社会的価値観は、皆さんを「想定外」の未来へ誘うはずです。

技術革新の激しい時代において、「学びを収めた、学びを終えた」という意味で「卒業」という言葉を使うのは適切ではありません。ゴッドハンドと呼ばれた外科医も、内視鏡手術という低侵襲手術（体への負担の少ない患者さんに優しい手術）の技術を習得できなければ、第一線から退くしかありません。40年前には英文タイプができることは就職にきわめて有利でしたが、いまやタイピング技能検定特級は、特別な価値を有してはいません。

テクノロジーの進化は、これまでの価値観、仕事のやり方を一変します。特殊技能と呼ばれた仕事や伝統的企業を消滅させます。大学を卒業する、それは社会の新しい変化をキャッチして、いち早く対応できるための「基礎力」を有しているということを意味しているにすぎません。これからはその「基礎力」をさらに鍛え上げていく必要があります。

私には、知識はあったにもかかわらず、世の中の大変化をキャッチできなかった苦い思い出があります。今から30年ほど前に、情報センター長から、若かった私に対して、インターネットをやってみませんかと提案されたことがあります。そのとき、ファクスで十分じゃないか、まだだれもやっていないのに、と答えてしまったのです。時代の変化を見逃した瞬間でした。

知識は、ただ知っているだけでは役には立ちません。「ネットワーク外部性」という言葉は知っていても、インターネットという新しいテクノロジーが仕事を、企業を、商取引を、物流を、通信を、コミュニケーションを、生活をどのように変化させていくのか、30年前には想像できませんでした。

世の中の新しい変化をいち早くキャッチするには、アンテナを高く張らねばなりません。

新聞には「べた記事」があります。新聞下段にある一段にまとめられた短い記事です。そこに、経営学者のドラッカーのいう「すでに起こった未来」が書かれていることがあるのです。

大学卒業は学びの終了ではなく、大学で身に着けた「基礎力」を「応用力」にするための新しい学びの始まりです。皆さんのこれからの学びに期待しています。

商学部長
渡辺 岳夫
WATANABE Takeo

他人（ヒト）は変えられない　人は変わるもの

卒業おめでとうございます。長い学生生活もいよいよ終わり、これから多くの人は権限と役割の階層関係から成り立っている「組織」において、少なくとも１日の三分の一を過ごすことになるでしょう。最初に属するレイヤーでは、おそらく自分が自由に振る舞うことのできる仕事のシーンは少ないでしょう。しかし、どんな仕事でも、自分の創意工夫を反映させる余地はあります。ある有名なコーヒーチェーンの会社の元社長の話ですが、駅前でコーヒーの割引券を街行く人に配る仕事にバイトが苦戦しているのを見て、代わりに社長自身が配ってみたところ、たった１時間余りで配布しきってしまったそうです。一見、つまらないルーティン業務でも，簡単すぎてつまらないと思えるような仕事でも、心の持ち様や見方を変えれば取り組みがいのあるものに変えることができるのです。組織において腐ってしまいそうな時には、自分の頭の中にある凝り固まったフレームをチェンジしてみましょう。

さて、そしていずれ諸君は「組織」におけるリーダーになっていくことでしょう。中央大学の卒業生の多くがそうであるように。上位のレイヤーに属するようになると、「組織」が実に人間臭い人間の集団であることを，否が応でも理解するようになるでしょう。人によって価値観、思想、宗教、あるいは善悪の基準などが多様であり、組織のために良かれと思ってしたことが、実際には組織にネガティブな影響を及ぼしてしまうこともあるのです。そういった際に、リーダーとしての皆さんはきっとこう思うでしょう。「他人（ヒト）を組織にとって望ましい方向に変えたい」と。しかし、他人（ヒト）は変えられません。人は自らの意思によってしか自らを変えることはできないのです。つまり人は変わることしかできないのです。リーダーとしてのあなたができることは、人が自ら変わることができるような環境や条件を整えてあげることです。他人（ヒト）を変えられないと嘆いたり、自分の周りにはどうしてこんな他人（ヒト）ばかり集まるのだと不満を漏らしたりするべきではありません。それらは、自分にはリーダーとしての資質がないということを、周囲に知らしめる効果しかありません。

自分を変えられるのは自分だけです。たとえ毎日する仕事が同じでも、心の持ち様次第で、その仕事に対する取組みを変えられます。心の持ち様を自ら変えることができるような、そして他人（ヒト）が心の持ち様を自然に変えることができるような環境を創ることができるような、そんな人を目指しませんか？

理工学部長
樫山 和男
KASHIYAMA Kazuo

未来社会を牽引する理工系人材のリーダーに！

理工学部卒業生および理工学研究科修了生の皆さん、ご卒業・ご修了誠におめでとうございます。後楽園キャンパスでの学生生活はいかがでしたでしょうか。皆さんは、４月から始まる社会人あるいは大学院生としての新生活への期待に胸をふくらませているものと拝察いたします。

わが国では近未来の社会像として「Society5.0」の概念が提唱され、現在その実現に向けて産学官で真剣な取り組みがなされています。Society 5.0 では、IoT（Internet of Things）で全ての人とモノがつながり、さまざまな知識や情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出すことで、経済的発展と社会的課題の解決を両立させて、人々が活力に満ちた質の高い生活を送ることのできる社会の構築を目指しています。

また、国連も2030年に向けて地球規模の課題の解決を目指す国際社会共通の目標である「SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）」を策定しています。この目標の実現には、これまで相容れることが難しかった「経済開発」「環境保護」「社会的包摂」の3つの要素の調和が求められています。「Society5.0」や「SDGs」で謳われている目標の達成には、科学技術の進歩とその成果の社会実装が必要不可欠であり、理工系人材である皆さんには今後活躍の舞台が数多く用意されていくと思われます。

しかし、一方で科学技術の成果を社会実装に結び付けるには、自動運転やドローンの例からも分かるように、法改正等も同時に必要になるため、文理融合の素養や理工系以外の分野の方々との緊密な連携が大変重要になります。皆さんには、ぜひ幅広い視野を身につけて未来社会を牽引する理工系人材のリーダーとなって活躍していただきたいと思います。

理工学部および理工学研究科の卒業生・修了生はこれまでに約６万５千人を数え、大手企業や公務員等でトップとなられた方も多数おり、さまざまな分野において目覚ましい活躍をしております。皆さんも先輩方の後に続いて、「中大理工」の名声をさらに高めてください。

最後になりますが、今年は新型コロナウイルスの影響で一堂に会しての卒業式の実施が困難な状況となりました。理工学部では、2020年秋の大学祭期間中に第２回理工ホームカミングデーを開催する予定です。その際には、卒業生の交流の場を設けたいと思います。ぜひ元気な姿で再び後楽園キャンパスに戻ってきてください。皆さんのご活躍を心より祈念いたします。

文学部長
宇佐美 毅
USAMI Takeshi

過去から未来へ

中央大学を卒業される皆さん、誠におめでとうございます。

私はテレビドラマを研究していますが、日本でテレビ放送が始まったのは1953年のことです。まだ60数年の歴史しかありませんが、その中で多くの変化がありました。

たとえば、1960～70年代にはスポーツ根性ドラマ（スポ根）というものが流行しました。今見れば、虐待かハラスメントとしか思えないような厳しい練習に耐える選手たちが描かれ、そういうドラマが称賛されたのは、背景に戦後からの復興と高度経済成長があったからです。つまり、戦後の荒廃から自分たちの努力で日本を再興させ、豊かな国に築き上げたという信念と誇りがあるからこそ、努力がすべてに優先されるという価値観が生まれました。

あるいは1980年代には、トレンディードラマというものが流行しました。これはバブル景気という空前の好景気が背景にあり、努力は必要ない、無駄遣いにも見えるような消費が美徳である、幸福は達成済みだ、という享楽的な価値観が生まれました。そんな時代の中で、テレビドラマも「明るい」「軽い」「おしゃれ」という軽薄なドラマが量産されました。しかし、その風潮は10年も続きませんでした。その直後にはバブル景気の崩壊が起こり、子どもが「同情するなら金をくれ」と叫ぶような、悲惨なドラマが注目されました。

わずか60数年の時代を見るだけでも時代はこれほど変化し、現在は個人や個性が尊重される時代のように見えます。しかし、これまでの短いテレビドラマ史を見るだけでも、一つの価値観は長く続いてこなかったことがわかります。Society5.0と呼ばれる新たな未来社会への移行が進行し、AIによって個人や個性といわれてきたものが分析され、データ化されていく現象が起きています。私から見れば、これまで個人や個性が尊重されてきたといっても、その場合の個人や個性とは何かということが曖昧なまま、いささか空虚なかけ声としてだけ語られてきたように思います。

今何が流行しているのか、今の社会の課題は何か、という観点だけでは十分ではありません。過去だけを見ている人は後ろ向きですが、今の一時的な流行や現象だけを見ている人もまた、実は未来を見ようとしていません。現在の一時的な現象だけを見るのではなく、過去から現在へという時間の幅と変化の過程を把握している人だけが、未来をも見通すことができます。私たちは過去に学び、それを現在の課題に結びつけて考えるからこそ、その努力は未来へつながっていきます。皆さんはこれからも過去と現在に向き合い、そしてこれからの未来を真摯に考えて続けてください。この先にある未来が輝かしいものであるかどうかは、皆さんのその姿勢にかかっています。

総合政策学部長
青木 英孝
AOKI Hidetaka

自分の頭で考え、自分の足で歩け

卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。また、ご家族など皆さんをこれまで支えてこられた方々にもお喜び申し上げます。

中央大学で過ごした4年間はいかがでしたか。ゼミでの卒業研究、授業の試験やレポート、リサーチ・フェスタでのプレゼンテーションなど、学びの場はたくさんあったと思います。多くの本を読み、先生やゼミ生と議論して、論理的思考力を鍛えられたでしょうか。スポーツや文化活動にも十分な時間を割けましたか。トレーニングで体を鍛えるとともに、芸術・美術・演劇・落語などに触れ、心を豊かにし、感性を磨けたでしょうか。社会勉強はどうでしたか。サークル活動、アルバイト、ボランティア、海外旅行など、キャンパス外の活動でも貴重な経験ができたのではないでしょうか。

総合政策学部では、国際性と学際性をベースにした問題解決の手法を学んだと思いますが、文化や価値観の多様性を実感できたでしょうか。異文化理解力は、ますますグローバル化する社会で、きっと大きな価値をもつと思います。また、問題を複眼的に見つめ、多面的に検討する力は、社会でもきっと役に立ちます。今、ダイバーシティーが求められています。皆さんが手にした国際性と学際性の力は、相手の立場に立って考えることや、相手を認めて許容するといった、人として本当に大切な姿勢に反映されてくるはずです。

皆さんは今、社会人への門出の時を迎えました。期待に胸を膨らませるとともに、大人としての責任の重さをひしひしと感じているかもしれません。皆さんが手にした学位記は中央大学で学んだ証です。中大卒業生としての自覚と自信をもってください。ユニバーシティー・メッセージは「行動する知性。― Knowledge into Action ―」。ゼミ生には「自分の頭で考え、自分の足で歩け」と言ってきました。批判はするが自ら動けない人ではダメ。指示待ちと言われるように、他人から言われたことをこなすだけでもダメ。自分で考え、自分で行動すること。自立した大人であることが求められると思います。行動する知性を体現し、社会に出てから益々ご活躍されることを期待しています。

余談ですが、先日ゼミ生と「初任給どうするトーク」をしました。ぜひ、皆さんをこれまで支えてきてくれた大切な人に、感謝の気持ちを伝えてください。普段から何気なく感謝していても、気持ちを素直に伝えられる機会はさほど多くないかもしれませんので。